



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.96  
2011.9.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 縄文の使用痕

—石器と先史時代の生活がもっと明らかになるために—

### 第20回

## 刃部と整形加工3 反方向の剥離

今回は、竹岡俊樹氏の設定した反方向の剥離について考えてみます。反方向の剥離とは、素材の背面側を打面として、主要剥離面側に剥離面がみられる加工のことです。反方向の剥離がみられる刃には使用痕が確認できない場合が多く、主に形態整形加工に用いられたと思われます。搔器などでは、素材剥片のヒンジフラクチャーの末端形状を利用して、反方向から急角度の刃部を作出しているものが見られます(この場合正反方向の関係は逆転します)。

さらに以下のような特殊な使い方が見受けられます。

**1.** 図1は三内丸山遺跡第6鉄塔地区第Vb層出土石匙です。第18、19回で紹介したように、円筒下層式期の石匙刃部は正方向(主要剥離面を打面に素材背面側に加工面がみられる)剥離が主体的です。この石匙は、正方向から剥離し、さらに写真にあるように反方向からも剥離しています。使用痕との切り合い関係を見てみると、素材主要剥離面にはAタイプ光沢がみられますが、この加工はAタイプ光沢を切っています。イネ科植物に対して使用した後に、この反方向加工がなされたと考えられます。この加工部分に使用痕がみられないので、刃部を破壊もしくは、石器の作り替えが行われたかもしれません。

横形石匙の場合さらにはっきりとしており、模式図で示せば図2の通りです。青森市宮田館遺跡、新町野遺跡や八戸市畑内遺跡などで確認されています。

**2.** 図3は三内丸山遺跡第6鉄塔地区第Vb層出土縦形石匙です。先端部を反方向から尖頭状に加工し、顕著な摩滅がみられます(写真2)。主要剥離面に使用痕(写真1)が確認されていますが、反方向剥離と摩滅によって切られているので、この石匙は石錐に作り替えられたと思われます。

現時点で左記の2例のような反方向の剥離は円筒下層式にみられる剥離面であり、それ以外の土器文化圏の石器には確認されていません。

3回にわたって東北地方を中心に剥離面と刃部の関係をみてきました。概説書などには、土器は地域性・時代性が詳細に論じられています。一方石器は生産用語として一括に扱われることが多いです。土器ほどでないにしても、石器にも地域性などがあります。剥離の種類と刃部位置の特定研究が進めば、石器研究も概説書でも相応の分量が割り当てられ論じられるのではないのでしょうか。

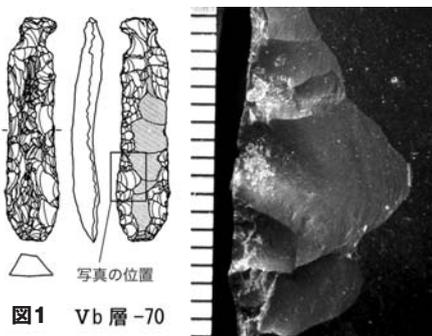


図1 Vb層-70

図1の石器実測図は『三内丸山遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第230集より転載。

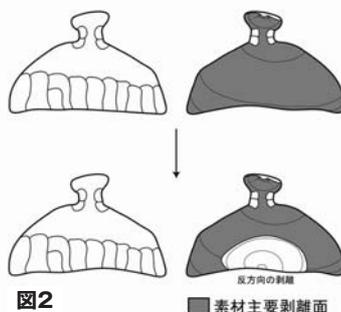


図2 素材主要剥離面

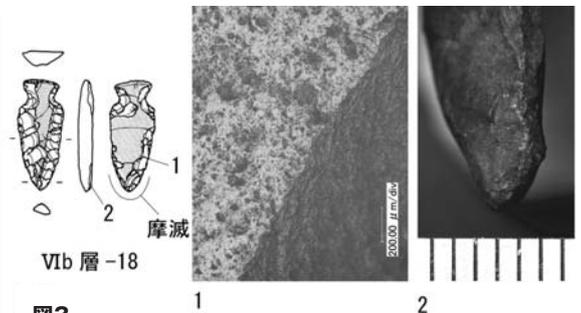


図3 Vb層-18

図3の石器実測図は『三内丸山遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第249集より転載。 ※各写真は筆者撮影

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

### 目次

■縄文の使用痕	刃部と整形加工3	高橋 哲 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第89回)	廣田佳久 …3
■考古学の履歴書	私の古代学覚え書(16)	桐原 健 …2	■考古学者の書棚 『古代への情熱』『発掘』	戸田哲也 …4

## 考古学の履歴書

## 私の古代学覚え書(第16回)

桐原 健

平成2年にNHKの松本文化センターから講師の依頼があった。まだ学校勤務の時で校長に伺いをたてると「よろしい」との事。「郷土の原始・古代の話」という題目で33回勤めた。カルチャー教室の熱っぽい空気のこととは夙に承っていたところで正にその通り、受講者十数人は男女ほぼ同数、男性は定年後の人ばかりで理工系畑の人が占めていた。

学校の授業通りに旧石器から9世紀迄と型通りに下ってきて30回を越えるともう話題がない。それに自分でも何と教条的な堅い話をしていると感じている。質問もせずテープにとったりして一方的に聞いている。学校の生徒は若いから耐えられるものこちらは年配の方々、それに受講料が高すぎる。それやこれやで講座を降り、会場費無料、駐車場付きの場所を探した。幸い近くに旧制松本高等学校がある。大正9年の建造で木造2階建て本館と平屋造りの講堂は昭和56年に長野県宝に指定され、以後文化施設として全館が活用されている。使用許可を受けて「あがたの森古代学同好会」が平成4年11月にスタートした。みんなが出した条件はもう齢だから一度聴いてもすぐに忘れてしまう。繰り返して結構、時代を追わずとも演題はその時その時でよろしい。私の条件は旧石器は勘弁してほしい。会名は考古学ではなく古代学にしてほしい。我々の関心は土偶・石棒・銅鐸など縄文人、弥生人の精神生活にある。彼等の思考推察にモノに依る考古学では限界がある。というのが理由で、それに加えて学生時代に受けた「古代学」の意識がある。かくて月2回の勉強会が始まった。樋口昇一さんが「お前のためにも絶対に手離すな」。「そのつもり」。以来現在に至っている。

それでも初めの頃は壁に向かって話をしている状態、質問は「騎馬民族日本征服説」と「安曇族」の二つだけ。

画期が生じたのは4年目頃からだろうか。以下述べる。平成8年、青森の三内丸山遺跡では高さ17mの櫓が建ち、小林達雄さんが縄文ランドスケープを唱えて、冬至の日、筑波山からの日の出を栃木・寺野東の環状盛り土遺構からのぞんだ写真を発表している。賛同者が多いが、山で囲まれている信州ではどうとでもこじつけられるとする反対者もいて教室は盛り上がった。関連して、半日村と呼ばれる西山地域でも微地形によっては陽の射す時間の長い地点がある。不思議とかかる地域には縄文遺跡があるという話が出た。

縄文農耕論で諏訪郡原村・大石遺跡出土のエゴマの炭化種子の話をした。安曇の農家である深沢恒則さんはエゴマを栽培していたが収穫時の手違いから全部こぼしてしまった。そんな時に大石のエゴマの話聞き、自然落下した種子はどの様に発芽するかを観察してみた。耕起せずに春ま

で待ったが全然発芽せず、5月に入っても同様、仕方なく新しい種子を5月31日に蒔いたら1週間で発芽した。結論は人が手で土を被けてやらなければ駄目、どうも鳥がやってきて啄んでしまったらしい。

平成2年に千曲川に臨む更級幅田の円光坊遺跡の報告書が刊行。竪穴住居・立石・集石で埋め尽されている縄文後・晩期の遺跡で遺構の一つに径7mの土器集積址が存在。大きな土器は潰され、小型土器は完存。これに礫石・木炭片・灰・非実用な土製品・石製品が伴っている。集積址の中央に巾着形をした小型壺があり、うちには砂鉄が充満していた。あらゆる面から関心のもたれる壺なのだが平成10年、県埋文センターの町田勝則さんから指摘されるまで気付かなかった。まこと迂叟と云われても弁疏できない。このことを紹介したら工業系の会社員だった中野昭一郎さんが数種類の砂鉄をマッチ箱に埋めてきてライターの火に振りかけてみせた。こぼれ松葉の火が散った。

縄文文化に鉄の介入する余地はない。このことが先入観念となって目を曇らしていた。円光坊の大洞BC人は砂鉄を知っていた。器高・腹径共に5cmの小壺に入っていた砂鉄は所有者にとって貴重極まるものだった。更級の里歴史資料館の翠川泰弘さんは砂鉄を炉の中に落して焼いたものだろうと推察している。縄文晩期にこんな所作をするのは司祭者をおいてない。

この様な事件が続いてようやく気楽に発言できる勉強会らしい雰囲気とできた。

この前も縄文の埋甕につき時間と空間の限界を説明し、用途の一つに胎盤収納説のあることを述べたら即座に否定された。出産は時代・地域を問わず起っている。

しかし、20年近くも続けていると会員の高齢化が顕著となる。始めから会員の年齢は定年を越えていた。年に1回、巡検と称して1泊2日の小旅行を行っている。マイクロバス利用で朝6時発、夕方6時宿舎着、昼食はバス中でお握りという強行軍、できるだけ観ようというので7月に実施、そして7年前には勇を鼓して2泊3日に出雲まで足をのばした。これが限界で以後は日帰り、又、見学できる大発掘も少なくなった。会員数は現在1桁台となっている。

略 歴	昭和8年1月3日	長野県松本市に生まれる
	昭和20年4月	長野県立松本第二中学校入学
	昭和26年3月	長野県松本県ヶ丘高校卒業
	昭和26年4月	國學院大学文学部史学科入学
	昭和30年3月	同校史学科卒業(日本史専攻)
	昭和30年4月	長野県高等学校教諭となる
	平成5年3月	定年退職
	(38年の間、14年間は県教育委員会文化課勤務)	
	平成6年4月	信州豊南短大非常勤講師
	平成21年3月	同大学非常勤講師 辞任

## リレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 89

#### 土佐国衙跡 ～ 高知県南国市

廣田 佳久

国の史跡が少ない高知県の中で、将来的にその有力な候補の一つとして挙げることができる遺跡に土佐国衙跡がある。土佐国は『延喜式』に中国と記載され、『土佐日記』で有名な紀貫之が延長8年(930年)1月から承平5年(935年)2月まで土佐守として赴任している。また、都への行程が上り日数35日、下り日数18日、海路日数25日を要することから遠流の地とされ、小袖貝伝説など遠流に纏わる伝説が各地に残る。

土佐国衙跡は、高知平野のほぼ中央、南国市比江の地が推定地となっており、土地には「コクチョウ」、「タイリ」のように国庁、内裏をそのまま指し示した地名(ホノギ：小字)が残っている。東側と南側には国分川が流れ、北側には比江山を負い、鬼門には塔心礎が国の史跡となる比江廃寺があり、西側には土佐国分寺が四国霊場八十八ヶ所29番霊場として現在まで法灯を保っており、地相的に四神相応に則った設計になっていると言えそうである。地形的には比江山の高位段丘、南山腹には中位段丘、そして「タイリ」の地名の残る中位下段丘と「コクチョウ」の地名が残る自然堤防に分れる。昭和32年7月5日に県の史跡となり、昭和54年度からは国庫補助を受けた重要遺跡確認緊急調査が開始され、筆者も昭和56年度から調査に関わってきた。調査では「官」の墨書土器、円面硯、緑釉陶器などその可能性を示唆する資料が出土したものの、国衙政庁(以下「国庁」という。)と判断される遺構の確認までには至っていない。

発掘調査成果からみると、遺構は中位段丘面と自然堤防上から確認されており、その出現は弥生時代後期後半から末頃と考えられる。人の痕跡は一旦途絶えるものの、古墳時代後期に再び集落が出現し、引き続き白鳳期には比江廃寺が建立され、奈良時代には国衙が設置されたとみられ、中世まで密度の差はみられるものの遺構・遺物が検出される。



土佐国衙跡遺構完掘状態(金屋地区の調査)

この中で中心となるのが奈良時代後半から平安時代前半で、確認された遺構の約50%がこの時期に属する。一方、復元された建物跡は43棟あり、いずれも掘立柱建物で、廂構造のものはほとんど確認されておらず、その規模は桁行3～4間、梁行2間、柱間寸法は桁行6～7尺、梁行5～6尺、柱穴規模は一辺1m未満と小規模である。これは土佐国衙における周辺官衙の一般的な建物規模と捉えることができる。その中で、地鎮祭が行われたとみられる建物跡が1棟確認されている。規模は桁行4間(柱間寸法6～8尺)、梁行2間(柱間寸法7.5尺)と土佐国衙では4番目の規模で、四隅の柱穴から土師質土器の杯が完全な形で出土している。近年、土佐国衙以外で、官衙関連遺跡の中心部の建物とみられる柱穴が一辺1.0～1.5m規模の建物跡が確認され、緑釉陶器などの搬入品も目立って出土している。これらから推測すると、国庁は周辺官衙の建物とは一線を画する規模の建物で構成されていたのであろう。

また、立地的には、標高が高く、中央部北側の中位段丘面に中心部が造営されたと見る向きも多いが、発掘調査では古墳時代の竪穴建物跡や古代の小規模な建物跡が検出される程度で、期待される結果は出ていない。一方、南側の一段低い比江地区中央部、東西80m、南北120mの範囲はビニールハウスが建っている関係で未調査となっている。確認された建物の中で規模の大きなものはいずれもこの未調査部分の隣接地から検出されており、ここから離れるに従って建物跡は小規模となり、かつ減少傾向となる。このような状況から国庁は比江地区中央部の未調査部分に遺存するのではないかと推測している。当初は、一辺90m以上の規模を有する国庁が想定されたが、伊賀国庁跡が確認されるに至り、国の等級によって国庁の規模も異なるものとみられ、中国である土佐国であれば先の範囲に国庁があってもあながち不思議ではないように思われる。

土佐国衙跡の調査に10年近く関わったことが官衙や建物跡に関心を持つ切っ掛けともなり、今でも当時の遺構検出の際の興奮は忘れることができない。全国的には国衙跡の調査は進み、大国の近江国衙跡を始めとして下国の伊賀国衙跡まで多くの国衙で国庁が確認され、史跡化も進み、門、塀、建物なども復元され、往時の面影を醸し出している。

土佐国衙跡の調査は中断されてはいるが、将来必ずその所在を確認しなければならない高知県の課題でもあろう。いつの日か、眼前に明らかにし、史跡として後世に伝えて行きたいものである。かつて、紀貫之が国司を務めたとされる土佐国の国庁は果たして何処でその時を待っているのだろうか。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは大山真充さんです。

## 考古学者の書棚

「古代への情熱」シュリーマン著 村田数之亮訳／岩波書店(1954)

「発掘」曾野寿彦／中央公論社(1964)

戸田 哲也

私は自他ともに認める、典型的考古ボーイであった。小学校低学年のころから探検隊ということばにあこがれ、なぜか家にあった子供向け探検・冒険物語り全集を読みふけていた。アムンゼンとスコットの南極点到達争い、ヘディン、スタインのシルクロード探検-幻の湖口ブノール、失われたローラン、敦煌の発見物語り-や、アトランティック大陸、ムー大陸の謎、など頭の中は世界を駆けめぐっていたのである。

小学校4年(1956年)頃のある日、我が家の書棚でH・シュリーマン自伝「古代への情熱」岩波文庫(1954年)を見つけ、そっと頁をめくったのである。難解な文章と子供には難しすぎる漢字に苦しみつつも、波乱万丈の生い立ちと、発掘のロマン、目に飛び込んでくる豊富な遺物、遺跡の挿図の鮮烈さに引き込まれてしまった。シュリーマンが子供の頃、ミナと一緒に忍び込んだ古城の情景を想像するとなぜか心の中がさわぐのであった。そしてトロイの発掘が始まり、プリアモスの財宝を掘り出す緊張感、妻ソフィアのショールに入れ持ち出す有様を臨場感に包まれながら読みふけたのである。

ギリシャ神話の時代を掘り出したシュリーマンの成功と発見の物語りは、探検家を目指そうとしていた私の子供心に、明確な夢と目標を与えた。そしてそのままシュリーマンの物語りに引かれて今日まで来た気がする。

家にあった「古代への情熱」から啓示を得たことについて、父に話したことはないが、早稲田で西洋史を学んだ父が誇ってくれた大切な種であったことを感謝している。

古書展を回っていて、「古代への情熱」を見かけると必ず買うのである。いつも書棚には10～20冊が積み上がっており、シュリーマンの物語り-これ自体がすでに現代のギリシャ神話になっているのかもしれないが-を讀んでみたい大学生、若者に差し上げている。

本題にもどるが、中学入学の頃、都内のデパートで東大チームによるイラク・イラン調査展が開催されていた。入り口を入ったところにテルがいくつも並んでいる大きな航空写真パネルがあった。この丘(遺丘)の土の下にはまだ発掘されていない遺跡が埋もれているのだ、思わず掘りたいと声が出てしまった。その時、入口付近に集まっていた調査団関係者と思われる方々がオーオーこのガキがと微笑んでいたことを思い出すのである。

その先生方の中に後年、私の恩師となる佐藤達夫先生、そしてこの後取りあげる曾野寿彦先生が多分おられたと思う-そう思いたい-のであるが、私の考古学スタート前夜の大切な思い出として残っている。

話は逸れるがシュリーマンがトロイを発掘したのが1873年、続けてミケーネを発掘して欧米の大喝采を受けていた頃、東洋のはずれの島国の小さな貝塚が発掘された。1877年の大森貝塚の調査である。そしてその報告書(1879年)は、世界に比してトップクラスの考古学調査報告であった。近藤・佐原編訳「大森貝塚」岩波文庫(1983年)は現在絶版となっているが、ハンディでしかも安く、この本も見つければ必ず買い、縄文学徒にさしあげている。現在書棚に10冊はストックしている。

曾野寿彦著「発掘-遺跡をして語らせる-」中公新書(1964年)に接したのは大学院時代であり、発刊からずいぶん遅れてのことであった。1973年、林謙作氏の誘いにより岩手県繫遺跡の調査に参加する機会を得、その調査主任が東大アンデス調査団員の上野猛氏であった。上野さんからはアンデスの思い出をうかがい、また同書を知らされたのである。この繫遺跡で出会った方々との楽しい思い出はまた別の機会に記すこととしたい。

この本は東京大学が行ったイラク・イラン遺跡調査とアンデス遺跡調査の新旧両大陸にまたがる物語りであり、発掘調査と考古学の両方にわたる方法論が遺跡の調査を進めていく中で具体的に実にうまく述べられている。

遺跡の発掘、発見物語りは日本にも、海外にも多くあるが、自らの遺跡発掘を通して考古学の方法論をこれだけ詳細かつ目的的に書いた書は他に無いといえる。その意味においてこの書は一般向けの体裁を取っているが、考古学者、考古学徒に伝えたいとする曾野の考古学に対する姿勢として受け止められるのである。

著者の曾野寿彦氏は両大陸の調査をへて、「西アジアの初期農耕文化」山川出版社、と題する博士論文を提出するが翌1968年45歳の若さで他界された。そして同じくイラク・イラン調査団員であった佐藤達夫先生は1977年51歳で他界されてしまう。同じ頃、岩手の上野猛氏も亡くなられてしまった。この時代、日本と世界をつなぐ大切な学者を早くに失ったのである。

## アルカ通信 No.96

発行日 2011年9月1日  
 発行人 角張淳一  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp